
バカとテストとショタ少年！？

げんげん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとショタ少年！？

【NZコード】

NZ8905W

【作者名】

げんげん

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣にオリキャラを出してみました

見た目が小学生の健吾。

そんな健吾が明久たちFクラスのメンバーと一緒に
学校で大暴れ！？

初めて書くので暖かい目で見てください

人物紹介（前書き）

どうも、げんげんと申します。
よろしくお願いします

人物紹介

ではさつそくオリキャラ説明からー

神田 健吾（16）

文月学園に通う高校生。

幼い容姿で、たびたびではなく、ほとんどの確率で小学生に間違えられる。

でも中身はすごく大人・・・・ではなく黒い。でも面倒見はいため、外見のことがなければ

お兄さん気質

明久、雄二とは悪友。
料理とか得意。

得意科目は理科
苦手科目は国語

所属はFクラス

召喚獣は小学生の制服を着ている。

武器は文房具

腕輪の能力は「急成長」

能力の内容については、本編を読んで
確認してください

人物紹介（後書き）

とりあえず人物紹介でした

こんな感じで書いていくので

感想 アドバイスなどあつたらお願いします

プロローグ（前書き）

プロローグです

Fクラスのメンバーはまだですが

明久はでます

プロローグ

空を見上げると満開の花びらが、空いっぱいに咲いていた。
「そんな日でなければ、少しくらいは楽しい気持ちになれたのだろう。しかし、俺にはそんな気持ちになれない理由があった。

それは、この校門をくぐった先にある。

「おい、なんの用だ？ つて榎田か。小学生かと思つたぞ」

校門に立つている鉄人—西村先生が笑いながら言つ。思わず拳を握るが、鉄人には勝てないことがわかつてるので慌てて手を引っ込める。

「遅刻だぞ。とりあえず、お前にはこれだ」

鉄人に、封筒を渡される。これが俺が今日憂鬱だった理由の根源だ。新学期、誰でも憂鬱になるだろ？

「お前は特別にもう一度振り分け試験をしてもいいんだぞ？」
「いや、こうなつた以上はしうがないつす。それにー」

俺は、校門を目指して走つてくるバカを見る。

「どうせ、あいつも一緒なんでしょう？」

「それもそうだな」

明久は息を切らしながら鉄人を見て、それから俺を見た。といつても俺の横顔だけだけど。

「あつ！？ 鉄人が小学生に手を！！」

「出してない！ よく見ろ、お前もよく知つてゐやつだらうが！！」

」

「ほえ」

明久がいかにもバカっぽい声を出す。もつこいつを殴ればいいかな？

「あつ、なんだ健吾か」

「健吾か！じゃねえよ」

俺が不機嫌そうな声を出すと明久は顔の前で手を合わせた。

「『めん』めん、じゃつ鉄人ーじゃなくて西村先生、ぐださい」

明久は鉄人の前に手を出す。いまさら呼び方直してもおそいと思うがな。

「もういい。早く教室に行け。遅刻だぞ」

「はーい（へーい）」

俺と明久は校門へ向かつた。隣では明久がうれしそうに封筒を破っている

「なんだお前。『機嫌だな？』

「だつて健吾に勝てると思つたらや」

「どうじつ」とだよ

明久は二口一「顔で俺を見る。

「いや、健吾はFクラスでしょ？ 今回のテストの調子良かつたん

だ、僕はきっとクラスくらいに・・・

明久の手が止まる。まあこいつが行くクラスなんて決まってるがな。

「健吾、一年よろしく」

若干暗くなつた明久の手には、大きくFと書かれた紙が握られていた。やつぱりか。

俺は、若干の不安を感じつつ、目の前の無駄にでかい校舎を眺めた・・・。

プロローグ（後書き）

ついで、我ながらの駄文。

がんばって直していきたいと思います。

次回からは上クラスメンバーも出ますので、お楽しみに！

第一問 俺と雄一と問題クラス（前書き）

サブタイトルとかタイトルとかそういうネーミングセンスが酷無です

だれかやさけてください。

と、まあこんなもんで、始まります

第一問 俺と雄一と問題クラス

Fクラスの教室についた俺は、教室の見た目を見て唖然とした。ここに来る前に見たAクラスは見た目もきれいだつたというのに、なんだ? ここには見た目もボロボロ。Aクラスをあんなにするんだつたら、その金をここにまわせつての。

思わずため息をこぼすと、明久がなにやらそわそわしているのに気づいた。どうせ、遅刻したから変な印象を持たれたりとかするんじゃないかと思つてるんだろう。

俺は明久の代わりにFクラスの扉を開けた。

「すいません、遅れましたー」

「早く座れ、うじ虫やろ・・・う・・・! ?」

「あれ? 雄一なんでそんなとこに? ー」

俺の言葉をさえぎつて、雄一が教室から飛び出し、俺を廊下に連れ出した。

えらくあせつてるが・・・なんだ?

「雄一? どうしたの、慌てて。健吾になにか用? 」

「そうだぞ。突然引っ張つてきやがつて」

明久が驚きながら雄一を見る。雄一は息を整えてから俺を見た。

「健吾、なんでFクラスにいるんだよー。お前ならAクラスなんて簡単に・・・」

「雄一知らないの? 健吾テスト受けてないから」

正確に言えば、受けようとはしたけど、受けさせてくれなかつただ

けどな。

「教師に迷子の小学生と間違えられたんだよ。そんで説明が終わって、
た時にはテストが終了してて、
無得点扱いってことだ」

今、説明しても腹がたつ。あの教師、新米か知らないが、俺の顔を見るなり

「僕? 迷子かな? 大丈夫?」

なんて言つてきやがつた。説明しても納得しないし。そういえばあいつ見てないな。

「そうなのか・・・。たくつ、なんだつてこのクラスに・・・」

雄一が焦つたように言つ。じつはこんなに動搖するのは初めてみたな。

「どうしたの? 雄一」

「お前らは今來たから知らないかもしねーが、あのクラス、Fクラスはだいぶ問題がある」

「問題? 成績とか?」

「それもあるけどな。たとえば秀吉だ」

秀吉? あいつもFクラスなのか。まあ演劇バカだしな。

「あいつがクラスに入つた瞬間大騒ぎだぞ。健吾なんか入つたら・・・

・

「入つたら?」

雄一がちらりと俺を見る。なんだか俺を哀れむように見ていた気がするが、あまり気にしないほうがいいのかもしない。

「良くて誘拐だな」

「悪くてじやなくて！？」

良くてつて、悪かつたらなにされるんだ？いや、そういうじゃない。平気で誘拐するつていつたいどんなクラスなんだよ。

「まあ俺たちもいるしな。平氣だる」

「そうだよ。もしもの時は兄ちゃんたちが一つで健吾！ 僕の関節はそっちには曲がらなーー」

「俺たちがいなくても・・・平氣かもしれないな」

明久に関節技をかける俺を見て雄一が言ひ。誰が兄ちゃんだ！ 同い年だつつの！！

だいぶ遅れて教室に入る。どうやらまだ教師は来ていないようだった。俺は雄一と明久の後ろにいるという形で、まだ教室には入っていないが、中はよく見える。畳にちやぶ台。思わずため息が出るほどの光景だなこれは。

「みんな悪い。少し遅れた」

まずは雄一が教室に入った。団体ばかりでかい雄一がどいたため、さらに視界が開ける。おっ、秀吉もいるけど、ムツツリーーーもいるじゃねえか。

「おい、代表、少し質問があるんだが」

代表？　ああ、このクラスの代表が雄二つてことか。雄二の下につくってのはいい気がしねえが、このクラスを動かせるつてところなら得かもしんねえな。

にしても、雄二はこのクラスをひどい言い方してたが、今雄二に話しかけたやつみたいにまじめそうな奴もいるじゃねえか。誘拐なんてするわけが・・・

「さつきの少年は誰の弟だ！　なんなら、一田教室に・・・」

「おい、あいつあの子を独り占めする気だぞ！」

「待て！　あの子をひざの上に乗せるのはこの俺だ！」

「なんだと！　俺はあの子にお兄ちゃんと呼んでもらいたい

「俺たちがお兄ちゃんになればいいだろ？」「『それいいな！』

「

前言撤回。なんだこいつらは？少々、身の危険が・・・いや、むしろ体中に悪寒が・・・。

「健吾ではないか。久しぶりじゃのう」
「・・・久しぶり」

声のするほうを振り返ると、秀吉とムツツリー二が立っていた。秀吉は相変わらず・・・女みてえだな。ムツツリー二も、ずっと俺と秀吉撮ってるし。

「あれ？どうしたの、二人とも」
「さつき健吾が見えての。前の扉から出てきたのじゃ
・・・奴らにばれたら危険」

「こつらは、なんでこんなに慣れるのが早いんだ？」

「秀吉は大丈夫だったのか?」

「俺が聞くと、秀吉はとたんに暗い顔をした。

「数分であんなに告白されたのは初めてじゃ」

やつぱり秀吉も被害を受けていたらしい。もつ、家に帰つてもいいのかな?

「君たち、教室に入りなさい」

声に振り返ると、教師が立っていた。なんか、弱そうだな。こいつ本当に教師か? てか、この様子で教室に入るのは危険だと・・・。

「健吾、僕の後ろにいるんだよ」

「お、おひ」

明久の後ろに隠れながら、教室に入る。悔しいが、明久がかべになつているおかげで俺の姿は見えていらないらしい。とりあえず近くの席に座る。

「おい、あれせつきの子じゃないか?」

「なに! 吉井の弟だったのか!」

「じゃあ吉井を倒した奴がお兄ちゃんに・・・」

やつぱり見えていたらしい。そして明久の命に危険が・・・。

「豈さん、静かにしてください」

教師の声が聞こえる。一瞬はその声で静かになるも、ひそひそ声は

止まらない

「でも、制服着てるぞ」

「つてことは高校生なのか？」

「いや、カモフラージュかもしれない」

「吉井が心配でついてきたのかもしれないぞ」

「「「けなげだなあ」」」

なんだかあらぬ誤解を受けている気がする。

「よろしく頼むぞい」

秀吉の言葉で初めて気がついた。どうやらすでに血口紹介が始まつていたようだ。

「・・・土屋 康太」

おっ、次はムツツリー二か。じゃあ次は・・・あれ? あいつどつかで見覚えが。

俺の視線の先にはこのクラス唯一とも言える女子生徒が座つていた。あのポニーテール、見覚えがあるな。

「趣味は、吉井を殴ることと、健吾のお守りをすることです」

こんな迷惑な趣味をもつ女はあいつしかいない。島田 美波。あのやうう。Fクラスだったのか。俺と明久に向かつて手振りやがつて。女子だからつていつまでも何もしないと思うなよ。

明久の前の奴が話し終わり、明久が立ち上がった瞬間――

「すいません！ 遅れちゃいました！」

見覚えのある、ここにいるには似合わないあいつが入ってきた。

第一問 俺と雄一と問題クラス（後書き）

なんだか数人空気な気が

まあ気にしないでいきましょう

第三問 俺と姫路と血口紹介（前書き）

やつぱりサブタイが・・・。

誰かネーミングセンスをブリーズニー

といえず、姫路さんが出でます。

第三問俺と姫路と自己紹介

扉を勢いよく開けてはいったのはこのクラスに似合わないあの女。Aクラス確定とされた姫路 瑞希だった。

「姫路さん。自己紹介の途中ですので、好きな席に座つてください」「はい」

姫路は若干息を荒くしながら席につく。遅れそつだからって走ってきたんだろう。

「よ、吉井 明久です」

明久が姫路のこと気にながら自己紹介を始める。

今、低い声でダーリンとか聞こえたが、聞き間違いだよな。きっと。

明久が座るのを確認すると今度は俺の番だ。立ち上ると妙な歓声があがる。

「あの子だぞ」

「本当だ。ちやんと自己紹介できるのか?」「がんばれ、お兄ちゃんたちは見てるぞ」

お前らみみたいな兄を持つたことはない。

「えっと榎田 健吾だ。言ひとへけだ同じ歳だからな

兄ちゃんととか言つて騒いでたやつをじろりと見る。座るとまた話し声が聞こえてきた。

「えらいぞ、よく一人でできたな」

「えりいえりい」

なんかまだ子供扱いされてる気が・・・。こっぺんあこひらじめるか？

「なんだこんなとこにいるんですか？」

突然の質問に周りを見る。もう話してから時間は経ってるし、俺に向けてじゃないことは確かだが・・・

誰だ？あんな失礼きわまりない質問をする奴は。質問されるやつは相当の嫌われ者か、有名人だな。

「えっと、それは・・・」

質問を受けていたのは姫路だった。どうやら俺の次だつたようだな。つてことは理由は後者つてことか。

まあ姫路は有名だし、疑問に思っても仕方がないが・・・。結構騒ぎになつてたと思うがな。ここからはテスト中に寝てたのか？その後も噂になつてたぞ。

「テスト中に熱が出て途中でやめたんだよ。
無得点扱いつてやつだ」

別にそんな義理もないが、助け舟をだしてやる。まあ無得点扱いつてどこには俺も一緒だしな。

「神田・・・くん？」

突然の俺の声に姫路が目を丸くする。さつきから何も言わないなとは思っていたが、まさか今、俺の存在に気づいたとか言つんじゃないだろ？ って、明久の影になつて見えなかつたのか。

「俺も無得点。まあ引き分けだな」

「健吾？ 引き分けって？」

明久がきょとんとした顔で聞いてくる。あれ？ 俺、こいつと一緒に悪さしてなかつたけか？ ジャあ知つてるはずだと・・・。

「明久、健吾は姫路と学年トップを争つてたんだ。お前だつて知つてるはずだろ？」

「え？ ああ、そんな噂もあつたつけ？」

「噂じゃねえ。事実だ。あと、争つてはない。周りが離し立てただけだ。まあそれに乗つかつた俺も原因はあると思つけど」

「よ、吉井くん！？」

姫路がさらに目を丸くする。って、俺の存在に気づかなかつたのは仕方がないが、明久にも気づいてなかつたのかよ！ こいつ、どんだけ周りを見てないんだ？

「ここにちは姫路さん。身体の具合は「おい、姫路。もつ身体は平気なのか？」・・・」

明久の言葉に雄一の言葉が重なる。ああ、明久が分かりやすく落ち込んでいる。ここまでくると不憫だな。

「そこの人達、静かにしてくださいね」

教師が教卓をとんとんと叩いた。その瞬間、教卓がバラバラに崩れる。つて、どんだけボロボロなんだよーこの教室はー！

「ちょっと替えを取つてきます」

教師が、教室を出る。さすがに教卓の替えはあるのか。またボロボロじゃないだろ？

そんなことを考えているうちに、明久と雄一が廊下に出る。大方、姫路のことだろ？

明久の性格を考えりや、予想もできる。

「あ、あれ？ 吉井くん、まだ授業は終わってないですよ？」

姫路が廊下に出ようと立ち上がる。たぐり、一いつもおせかいだな。まあ自分のことで話し合つているとは夢にも思っていないんだろうけど。明久のためにもとりあえずとめとくか。

「おい、姫路。ほつといいやれ」

「どうしてですか？」

「男にはいろいろあるんだよ。それに、そろそろ戻る

「へ？」

明久と雄一が教室に入つてくる。ついでに教師もよたよたと教卓を運びながら教室に入つてきた。

「坂本くん、自己紹介がまだでしたね。あなたが最後です」

教師の言葉に雄一はどこか決意をこめたような表情で立ち上がった。こいつがこいついう顔をするときは、なにかおもしろいことをしていく

れるんだよな。

雄二が教卓の前に立つ。

「Fクラス代表、坂本 雄一だ。ところで、皆に一つ聞きたい」

雄二が、教室をゆっくりと見渡す。それにつられて何人かの生徒も教室を見渡す。これは相手を引き込みやすくするための雄二の技。交渉術では俺も雄二に勝てない。

「皆、不満はないか?」

「――大ありじやああああああ――」

クラスが沸き立つ。まあこんなボロボロ設備じやあ、嫌気も差すわな。せめて畳じやない床にしてもらいたかったよ、俺は。

「そこで提案なんだが・・・」

雄二の言葉にクラスがしんつとなる。

「Aクラスに試験召喚戦争をしかけてみないか?」

雄二の言葉にさつきとは違つたざわめきが起る。

「勝てるわけがない」

「そうだ、これ以上レベルを落とされるのも嫌だ」

「女子三人と第一人がいるんだ、もう十分だ」

一人、意味の分からぬやつもいるが、確かにそうだ。Fクラスはバカの集まり。頭のいいAクラスに勝負を仕掛けようなんて、どうかしてるとしか思えない。

「いいか、もしかして弟って俺のことじやないだらうな。

「いいか？ このクラスには△クラスに勝てるほどの人材がそろつているんだぞ？」

「それはどういふことだ？」

「いいか、まずは康太だ。おい、健吾を撮つてないでこいつちにこいつ

ムツツリーーが俺の後ろからぶんぶんと顔を振つて、前に出る。つて、まさかこいつ、俺の写真売りをばくつもりじゃ・・・去年もやられたからな。どうせ撮られるなら、撮影料でも請求しつくか。

「こいつはかの有名な寡黙なる性識者だ。セイシキザイ」

「なに！？ あいつが！」

「でもあいつ、建ちゃんもそうだが、秀吉のことも撮つていた」「ということは本物か！？」

次々と声があがる。てか誰だ、俺のこと建ちゃんなんて言つてるやつは。

「次に、姫路と健吾だ。」

クラスの視線が俺と姫路に向かられる。姫路はなにを言つているのかさつぱりとこいつ顔で雄一のことを見ていた。

「姫路は、有名だから皆実力は知つてゐるな。そして健吾、こいつは姫路と同じくらいの学力を持つてゐる。」

「なんだと。あのちびっ子がか！？」

「やうかそつか。兄ちゃんは鼻が高いぞ」

だから誰だよ！…さつきから勝手に兄面してゐやつは。あと、いつ

いつときは「兄ちゃん」

じゃなくて「義兄ちゃん」な。って、どっちも認めるか！

「そして、秀吉。俺も力にはなれる」

「あいつは、姉がAクラスの・・・！」

「坂本も確か昔神童と呼ばれてたとか」

「もしかしたら本当にいけるんじゃないか！？」

クラスの士氣があがる。まあさすが雄一だな。

「最後に、明久だつている」

－ シーン －

やつぱり、雄一のやつ、明久をおちに使つたか。

「誰だ？そいつ」

「あいつだよ。ダーリン」

「ああ、ダーリンか」

「やめてえ、ダーリンって呼ばないでえ！…」

明久が叫ぶ。まあ女子ならまだしも男子に言われりやあな。でも明久、これは自業自得だ。

「明久は観察処分者だ。まあ、健吾もだがな」

クラスがざわめく。

「観察処分者つて確かに・・・バカの代名詞だったよな」

それには一部、間違があるが、概ねあつてるな。

「待て、それでは健吾がかわいそうだ。観察処分者は……いわば問題児につけられる称号だな」

雄一がフォローを入れる。

「ち、ちよつと、僕は？ 僕はかわいそうじゃないの…？」

明久の嘆きが聞こえるが、無視だ。俺も、お前と一緒にされたくない。

「ここつらの利点は……そうだな。呪喚獣が自由に動かせる」

そう、雑用とかやらされるからな。そこらへんのやつらよりは細かい動きになれているところがある。そのかわり、フィードバックもあるがな。

「ちょっと待て。でもダメージが自分に返ってくるだらつへ。そんな簡単に召喚できなんじやないのか？」

「そうだ！ 建ちゃんに危ないことさせられん！」

「やっぱりその話には乗れない！」

さつきまでの士気が嘘のように下がっていく。これには雄一もおであげのようだつた。

雄一、そもそもこいつなつたのは明久の名前を挙げたお前のせいなんじや・・・。

(おー、健吾、このままじややまない。力を貸してくれ)

雄一が小声でいう。

(なつ、俺にあれをやれっていつのかー?) (頼む。あいつのため

(二)

雄一が明久を見る。明久は慌ててクラスの連中をなだめていた。確かに、あいつは姫路のためにやつてるんだもんな。仕方ない。

(雄一) 借りは返せよ

(おひ、すまん)

俺はクラスの連中の前まで歩くと、できるだけ近くのやつに聞こえようとして囁く。

「僕・・・信じてるよ。僕になにかあってもお兄ちゃんたちが助けてくれるつて。だから・・・」

少し、俯く。

「やひひよ。僕、お兄ちゃんたちの活躍、見たいな

できる限りの上目使い。これはある意味での俺の交渉術だ。って、反応が薄いな。もしかして失敗か?

「――YES! マイブラー!――」

どうやら、効くまでに時間がかかったらしい。でも士気は再びあがつたようだ。でも、誰がブランザーだ。

「よしぃ、お前らー! ペンをとれ! まずはロクラスから攻め落とすぞー!」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「ひつて俺たちの試験召喚戦争は始まった。

第三問 俺と姫路と血口紹介（後書き）

文字数がよく分からぬ。

自分ではめつさ書いているつもりなのですが・・・。

どのくらいがいいんですかね。

小説つて書くの難しいですねえ。

このサイトで小説書いてる人たちを尊敬します。

姫路と俺との歩かれかたのトラウマ（前書き）

なんだか毎日更新してますね

それくらい暇なんですよ休日つて

てなわけではじめます

姫路と俺と忘れかけのトラウマ

試験召喚戦争を始めるにはまず、対象クラスに戦線布告をしなくてはいけない。

問題はその使者だが・・・。

「明久、お前、Dクラスに行つて、戦線布告して来い」

「雄一の指名により、明久が使者となつた。

「でも、ひどい目にあつたりとかしないの」

「平気だ。Dクラスは安全だ」

「本当?」

「ああ。俺は友人をだますようなことはしない。」

「分かつた、行つてくるよ」

明久が意気揚々と教室を出て行く。雄一はこう見えて仲間思いのいいやつだ。確かに友人をだますようなまねはしない。友人は。

・・・数分後・・・

「ひ、ひどい目にあつた」

明久がボロボロで帰ってきた。そう、雄一は友人をだますようなまねはないが、駒は平氣でだます。これが戦場では必要なことだ。

「ちょっと雄「よしつ、これでひと段落だな」

「ねえ雄「今から、飯でも行くか」

「雄一!...」

「なんだよせつときか」

あつ、聞こえてたのか。‘つまい’とスルーしてたからでつせり聞こえてないのかと思ってた。

「雄二！僕をだましたな！」

「いいか明久。戦争に犠牲はつきものだ」

「だからって僕を犠牲にするなーー！」

「悪い悪い。代わりに昼飯おごってやるから、機嫌直せ」

「えつ？本当。ラッキー」

明久、前から思つてたけど切り替えが早いな・・・。

「昨日から塩と水だつたからなあ。栄養をしつかりと取つておいで
「そうじやなくて毎日栄養は取れ」

「だつてー お金ないし」

明久のせいだけだ。

「吉井くん、よければ明日、お弁当作つてきましょつか？」

「えつ、本当？」

「よかつたな。明久。栄養がとれる上に女子の手作りだぞ」

手作り・・・姫路の・・・もしかしてこれは止めたほうがいいのか？

「ふーん。瑞希、優しいのね」

島田が不機嫌そうに言つ。いや、優しいといつよつも「れはおせつかいだろ。

「よければ皆さんの分も作りますよ？」

余計なことを。明日は死んでも弁当を持って来よう。でないと死ぬ。

「本当か？」

「・・・うれしい」

「ではお言葉に甘えようかの」

なにも知らない奴らが。もしかしたら止めるよりも身をもつて分かれさせたほうが、こいつらのためにはなるのかも知れない。うん、すぐに対処をすれば死はないし。

「神田くんはどうですか？ またクッキーを持つてましょつか？」

「また？ どういうことだ姫路」

ク、クッキー……。あの殺人兵器のことか？

「神田くんのことを昔、小さな子と勘違いしたことがあります……。そのときに持っていたクッキーをあげたんです。」

忘れかけていた記憶がよみがえる。教室で一人寝ていたら、あいつがやってきて、

「迷子ですか？先生を呼んできますから。これ、食べて待ってください」

なんていいやがった。ああ、思い出すだけで震えが……。

「なんだ、そういうことか……って健吾、どうした？」

「すゞい震えてるよ？」

「ナンデモナイヨ。ヘイキダヨ。オーライチャンタチ」

「雄一 大変だ！健吾が壊れた！」

「ほ、保健室だ保健室！」

雄一と明久に連れられ保健室へと連行される。忘れかけていたトラウマだったのに。

その後、クッキーを見るだけで震えが止まらなかつたぞ。

「そういうば、あの日から榎田くん、私の顔をみるだけでああなつていました。

先生を連れてきたときにぐっすり眠つていたから、そのときに悪い夢でも見たんでしょうか

教室を出る直前、そんな姫路のつぶやきが聞こえた気がした。

なんかひょこひょこ色々なキャラが空気になつてますね。

危ない危ない。

さて、あとがきのネタもなくなつてきましたので小話を一つ。

実は、健吾と同じく、自分も小学生に間違えられることがよくあります。

高学年くらいになると間違えられても仕方ないですが、

明らかに低学年から中学年、1～4年生あたりに間違えられている気がします

旅行先のみやげ物屋で買い物をすると、「一人で買えてえらいねえ」

といわれます。別に不安な顔をしていたわけではありません。

とこつか、自分も高校生です! 買い物くらい一人でできます!!

とか、何回も買い物に行つてます!!

しかも、ボクって言われるんですよ…?

ボクじゃないし…。そこまお兄ちゃんつて書いてください…。

原因はなんでしょう? 服装…。ですかね?

うん、服装だー。やつこつりとこしておるー。ー。

つてわけで次回予告ー

次回からできれば試験召喚戦争にいきたいですね。

まあがんばります

俺といちごと教室での出来事（前書き）

今回ま瑞希、健吾、雄一が中心になりましたね。

俺と姫路と教室での出来事

「おい、こっちの隊は全滅だ。応援頼む！」

「こっちもだ！ 点数補充の時間をくれ！」

教室に数人が駆け込んでくる。今は試験召喚戦争の真っ最中だ。俺と姫路は雄一の命令で教室待機。どうやらできるかぎり俺と姫路の存在を知らせたくないらしい。

「俺たちはなにもしなくていいのか？ 本当に」

「ああ。明久もいるしな。できればお前らは使いたくない」

横に座っている雄一が言つ。こいつもなんだかんだで明久のことを信頼してんだな。

「ぬう。疲れたのじや」

秀吉がフラフラになりながら入ってくる。どうやら戦死はしていないようだが、点数はだいぶ削れているみたいだな。

「秀吉、どうなってる？」

「はつきり言つてぎりぎりじゃな。明久もがんばっておる」

ぎりぎりか。まだAクラスとも戦つてないのにこのままで平気なんか？

「離しなさい！ 絶対に殺してやるんだからあー」

なにか物騒なことを言いながら、島田が入ってくる。島田を連れて

いるのは・・・誰だっけ？

「おこ、どつした島田」

「吉井の奴。絶対に殺してやる」

ダメだ。全然聞こえてないらしい。

「健吾、島田を止められるか？」

「まあ」

絶対に使いたくない手をやる」となるがな。

「なり頼む。」の島田を冷静にしてやつてくれ

雄二の言葉に若干のため息をつく。確かに島田の力は必要かも知れないが、明久がらみなら別にいいんじゃないかな？

なんて考えつつ、島田の前に行く。島田は未だに我を失つているようであがまくっていた。

「お姉ちゃん、怖いよ？ ドツしたの？」

島田の制服の裾をくいくいと引っ張る。島田は我に帰り俺を見る。もう一押しだな。

「僕、僕ね。優しいお姉ちゃんがいいな」

笑顔でそうこうと島田の目に光が戻つてこするのが分かった。

「うんー、めんねー」

島田が俺を抱きしめ、ぐるぐると振り回す。田が回って気持ち悪い。

「島田。戻つたら試験を受けてくれ」

「あつ、うん」

島田が机に向かう。雄一はなにか考え方をしているようだ。俺と同じこと考えているんだろうけどいい打開策が見つからないようだな。珍しい。

「雄一、どうやって時間を稼ぐ?」

「そうだな……、あつ！」

雄一が俺を見てなにかをひらめいた様な顔をする。その顔がこいつは悪巧みを考えた時の顔。嫌な予感しかしない。そしてその予感は恐らく現実となるんだろうと、安易に想像できた。

試験召喚戦争の様子はそれはひどいものだった。ひどいしつつても、鉄人に連れていかれるクラスメイトたちの嘆きがひどいだけだけどな。

「戦死者は補習ーーー！」

「やーめーーー！」

あつ、また一人補習室行きになつた。俺もそろそろ動こうかと腹をくくる。

すると、それを待つていたかのように、放送が鳴つた。

一ピンポンパンボーンー

「校内にいる皆様にお願いです。校内で小学生が迷子になりました。

見つけ次第、職員室までお願ひします」

—ピンポンパンポーン—

放送が終了する。当然誰も迷子になっちゃいない。これは雄一が放送した偽の放送であり、俺への開始の合図だ。若干気は乗らないが、仕方が無い。

ため息をつくと、ちょうどロクラスの生徒が出てくる。さすが雄一、やつぱりここが一番ロクラスが多いようだな。

俺はゆっくりとその集団に近づく。もちろん、うつむき、演技をしながら。

「う、うえーん。」「」「ど」「お」

「ん？ あっ、この子放送の！？」 おい、皆、ちょっと来てくれ！

一人の合図でぞろぞろとロクラスの生徒がやってくる。

「お、おい。大丈夫か？」

一人が話しかけてくる。命令だとできるだけ連れ出せ、だったな。もう少ししじだけやってみるか。

「う、ひく、うわーん」

俺の声でまた何人かが現れる。このぐらいかな。

「僕？ 大丈夫だからねえ」

一人が俺に近づく。どうつもこつもガキ扱いしやがって……

！

ボソツ「試験召喚」
「え？」

「なんでもないよお姉ちゃん。だから
「うん。一緒に職員室にー」
「吹き飛べえええええーー！」
「「「えええええーー！」」「

集まつて来た奴らを片つ端から切りつける。腕輪の能力は使わない。
雄一に使うなつて命令されてるし、ストレス発散はすぐに終わると
つまらないからな。

しかも俺は少しでもダメージを受けるとそれが返つてくる。へ
タなことをして隙をみせるわけにはいかない。

ちなみに作戦はこうだ。まずは敵の最も集まる場所に味方の生
徒が近づく。そこであの放送を流し、俺の存在を示す。そこで、俺
が登場し、相手の注意をひく。その間味方が召喚獣を召喚し戦う。
最後に俺が全滅させる。まあ、確実に味方は戦死だろうが、これは
あくまでも補充試験が終わるまでの時間かせぎ。俺が何人か倒すな
ら、多少の犠牲は目をつむるらしい。

「戦死者は補習ー」
「「「いーやー」「」

とりあえずは排除終了つ まあ、Dクラスの連中には悪いけどこ
れも作戦のうちつてこつた。どの教師を連れてくるかはランダムだ
つたが、得意な科学だったし。瞬殺つてとこかな。

「Dクラス代表を打ち取つたぞおー！
「「「うおつしゃああーー！」」「

どこかで歓声が上がる。無事、姫路を代表のもとまで誘導できたりしないな。いや、時間かせぎしたかいがあるつてもんだ。

さてと、教室に戻るとするかな。

「あつ！ あなたね！？」迷子の小学生はつ！」

どこからか教師が現れる。確かにいはえつと。高うだ！高橋だ！どうしてこんなところに？

「もう安心よ？ わたし、お姉さんと一緒に行きましょうね」

「お、俺は小学生じゃ……」「…………」「…………」

全然話し聞いてない!? ちょつ、誰か助けー

そして俺は、職員室で誤解を解くまで監禁されるのであつた。

俺と姫路と教室での出来事（後書き）

わたくして、やつと始まつました試験召喚戦争。

これからどうなつりますか…。

てなわけで、これからの更新についてです

「この向日かはなにも考えず更新しまくっていたわけですが…」

話のストックがなくなりました。

そういうよー自分は夏休みとか遊びまくって宿題を忘れるタイプですよー！

てなわけで毎日更新はできなくなりました－ www

てかなんで今まで毎日更新できていたのか、いまだに不思議です

きつとい、テンションあがつて書きまくつていただけでしうがね。

でも、最初の宣言通り、週に一回は必ず、更新いたします。

ではまた次回ー

姫路と昭久の秘密会議（前書き）

最近やつとじつに慣れてしましました。

他のことと書く余裕も出てしまつたよー

唐笠さん、俺がベジータだー…さん、神夜 昭ひこ

感想いつもありがとうございます。

嬉しくて小躍りしていたら親に変な目で見られましたwww

姫路と明久の秘密会議

職員室での俺の決死の説明は約一時間にも渡った。たくつ、鉄人がいなかつたら

俺はどこかの小学校に連れていかれてたぞ。こここの制服だつて着てたのに、気づけよな。

ふう、とため息をつく。そんなことをしている間にすっかり放課後だ。明久たちはもう帰つただろうなあ・・・。

憂鬱な気持ちで教室に入ろうとすると、中で話し声が聞こえた。

「・・・にくつ・・・」

「私の友達も・・・」

「・・・肝臓とか・・・」

内容まではよく分からぬが、声は明久と姫路で違いない。そして明久の持つている封筒のようなもの・・・まさか!

「おい」

「!?

後ろから声をかけられ、驚いて振り返る。そこには雄一の姿があつた。

「雄一、大変だ!」

「ああ。とうとう明久にも春が「明久が女子と焼肉を食べにいこうとしてるぞ!」はあ?」

「いく」とか、「肝臓」とか単語しか出ていなかつたが、あれはお

そらく焼肉の話だ。そしてあの封筒。おそらくあれは割引券かなにかだ。

そして姫路の「私の友達」というのは一緒に行く面子のことだろう。
おそらく、焼肉屋の割引券か招待券をもらつたが、女子だけだとたくさんは食べられない。そこであまりちゃんとした食事をしていない明久も一緒にどうだ、と誘っていたのだろう。畜生、明久めえ・・・。

「お前、明久並だな」

「はあ？ なにがだよ」

明久と同じにはしてもらいたくない。

「いや、なんでもない。お前のカバンは俺が持つてる。帰るぞ」

雄一は哀れむような視線を俺に向かたあと、玄関に向かっていった。
俺も急いで雄一を追いかける。

帰り道に聞いたのだが、どうやらクラスの設備は変えなかつたら
しい。雄一のことだ、なにか作線があるんだろう。

それにしても焼肉か・・・。あつ、今日の夕飯は豚のしじょうが
焼きにしよう。

(いつもして健吾の勘違したまま、朝を迎えるのであつた・・・。)

姫路と明久の秘密会議（後書き）

なんだか他のことキャラが空気な気が
どうにか他のキャラの活躍も書きたいなと
思います！！

バカテスト1（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございます

今日は本編の合間の休憩タイム

（作者の）

はじまりはじまりー

バカテスト1

問 以下の意味をもつ「ことわざ」を答えなさい。

「（1）得意なことでも失敗してしまつ」と

「（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる」と

姫路瑞希の答え

「（1）弘法も筆の誤り」

教師のコメント

「正解です。他にも「河童の川流れ」や「猿も木から落ちる」などがありますね」

榎田健吾の答え

「（2）泣きつ面に蜂」

教師のコメント

「たいへんよくできました。むずかしいかんじがよくかけましたね」

・・・テスト返却後の感想・・・

健吾「なんで俺だけひらがなんだよ」

明久「すごいね健吾。蜂なんて漢字で書けたんだ！」

健吾「お前までガキ扱いかよ！！」

問 以下の英文を訳しなさい。（神田くんは除く）

「this is bookshelf that
and mother had used regularly
for

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

「正解です。よく勉強していますね」

榎田健吾の質問

「なんで俺だけやらなくていいんですか？」

教師の答え

「きみに『えい』はまだはやいです」

榎田健吾の答え

「早くないし、漢字ちゃんと読みますからーーー。」

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

「訳せたのは*she is*だけですか」

吉井明久の答え

「 * ? @ 」

教師のコメント

「できれば地球上の言語で」

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「いやあ、まったくわからなかつたよ。姫路さんはすごいなあ」
瑞希「そ、そんなことないです」

明久「いや、すごいつて。ってあれ、健吾どうしたの？静かだね」

健吾「・・・たい」

明久「ん？」

健吾「俺も普通にテストに答えたい――――！」

バカテスト1（後書き）

自分で見直していく思ったことー。

ギャグセンないです。自分。

でも今からでも遅くない！！

頑張って磨きます

つて、どうやれば磨けるんだろ。

姫路と弁当と殺人未遂（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございます

てなわけで続きです

姫路と弁当と殺人未遂

翌朝、俺はいつも通りに学校へ向かつ。

教室にはすでに明久たちが待機していた。

ふと明久を観察する。なんだかいつもと変わらない。恐らくまだ明久は焼肉を食べてないんだろう。

女子と一緒にいるのは少々うらやましいが……いや、そうでもないか。

まあ早くこいつには栄養をとつてもらいたいもんだな。

「どうしたの健吾。僕の顔になんかついてる？」

「いや別に。そういうやあ雄一。俺も補充試験は受けたほうがいいか？」

「おう。姫路もな。できれば点をあげてもらいたい」

「おう（はー）」

前回の補充試験は、急いでたのもあつたからな。時間さえあれば点はとれる。

……」うして俺たちは補充試験を受けた。

補充試験が終わつた時、時間はすでに昼になつていた。どうりで腹もすくわけだ。

「よし、飯でも食つか」

「じゃあ食堂でも行くか？」

「そうだね。あまり物もらえるかもしれないし」

弁当わけてやるからそういうことを言つた明久。

「あ、あの」

おずおずとこつた感じで声が聞こえる。

「お弁当、作つて来たんですけど……」

死神の声が聞こえる。姫路、お前が持つてているのは凶器か？

「姫路、本当に作つてきたのか？」

「ありがとう姫路さん。さつ、屋上に行こひー。」

明久が意氣揚々と屋上に向かう。弁当、作つてきてよかつたなあ。AEDがあつたら借りて行こひ。

俺は明久たちの命の安全を心配しつつ、屋上へと向かった。

・・・・・そして今、俺の田の前には地獄絵図が広がつている。まさか秀吉やムツツリー二もくたばるとは。

「吉井くんたちどうしたんでしょう」

「食い過ぎだよ。男はよくある」

「そうなの？ でもウチの分まで食べなくても……」

「島田は俺のを食え。あつでもその前に飲み物頼んでいいか？」

「いいわよ。なにがいい」

「なんでもいい。姫路も頼む。明久たちの分をな」

「はい！」

姫路と島田が屋上から出る。よしつ、邪魔者はいなくなつた。

「えじやせつそく」

俺はAEDを手に取る。まずは雄一だ。ここには脈がない。

「戻つてこい！！」

電気ショックを一度当てる。

「ん？」

なんという生命力。もう戻ってきたか。

雄
一
平氣か?

「ああ、ところで健吾、姫路のあれは素か？」

あの殺人料理が冗談だつたらよかつたのに。

「あれば本気だよ」

俺の遠い目に気づいたのか、雄一はなにも言わず俯く。この苦しみは一度経験しないとわからない。雄一、俺たちは同士だ。

そこで氣絶している奴らも。つて、そろそろ起こしたほうがいいかな。

「雄二、手伝ってくれ」

一〇六

雄」と一緒に残りを起します。」いづらばどんか氣絶していただけのようだから簡単に田を覚ました。

「む？ 僕はいつた」

「ひどい田にあつたのじゃ」

「…………死ぬかと思つた」

びつやう三人に後遺症はないよつだ。

「健吾、姫路さんたちは？」

「飲み物を買いに行つてゐる。お前ひまつれを食え」

「こんな」ともあひつかと用意していたおじきつを渡す。まあはつきり言つと俺の非常食だったが、ここひまつれが必要だろ。

「わーい。ありがとう。おいしいー」

「うむ。なかなかいけるのう」

「…………なつかしい味がする」

「お袋の味つてやつだな」

ただ白米を握つただけだがな。なんだかここまで言われると照れる。

「あつ！ ちよと、ウチらがいない間に！」

「皆さん、ジュースです」

島田と姫路が帰つてくる。姫路の手に缶しかないのを見ると、もうあの兵器は持つてないだろ。

じうじて波乱の昼休みは終わつた。ちなみに俺の弁当を食べた

島田と姫路が

「もつと頑張らなくひや」

と言つていたのは聞かなかつた」とこいつておいつ。島田はまだしも、姫路に頑張られると死亡者が増える。

姫路と弁当と殺人未遂（後書き）

はい、てなわけでなかなかAクラス編に行けない
一気にぱぱっとアイデアが欲しいものです

俺とカバンと壊された日常（前書き）

二重の意味で

昨日はたくさんあそびました。

てなわけで次話と――

俺とカバンと壊された日常

「人通りの多い廊下と無つたような事。

今は試験召喚戦争の真っ最中だ。当然、相手はBクラス。てなわけで俺も戦闘に出ている。

「健吾！ そつちに行つたよ」

「おう。試験召喚上

明久の合図で召喚獣を出す。フィールドには

になんか腹がたつ。

卷之三

「ちよいとあんな小こ子と戦うの？」

相手は女。
それならこっちのものだ。

「アーネンね」

女が攻撃を仕掛ける。その攻撃をよけずダメージがすくないところに当たるようにする。まあ、大分点差はあるから、どこに当たつてもたいしたことにはならないだろうけど。

「痛い！」

召喚獣に攻撃をしたはずなのに痛がる俺に
相手は動搖する。

「痛いよう。僕、観察処分者だから、ダメージが涙目で相手を見る。ちなみにこの涙はあぐびだ。
うずくまる俺に相手は攻撃をとめる

「そ、そうなの？」

「うん。痛い、痛いよお」

「うー、ごめんね。大丈夫？」

「うん。平氣。お姉ちゃんも謝らないで。これは戦争なんでしょう？
僕我慢するから」

立ち上がり笑顔を向ける。相手は辛い顔をして俺を見た。

「じゃ、じゃあ、」ごめんね

「ひい」

俺の召喚獣にまた攻撃がきそつてなる。そこで俺はとつそこしゃがみこんだ。

「あつ……」

相手の召喚獣の動きが鈍くなる。

その隙を待っていた。

「えつ」

俺の召喚獣が鉛筆を振り下ろす。芯の部分が相手の召喚獣に刺さると、相手の点数は0になる。

「わーい！ 勝てた勝てたー」

わざとらしく、ぴょんぴょんはねる。「うし」と疑問を持たれて終わりだからな。まあ、敵は倒しまくってるけど。

「よかつたね。じゃあね」

鉄人に連れていかれるその後ろ姿を見守る。心理戦も一つの戦法だから勘弁してくれよ。

「健吾、明久。ちょっとよいか？」

秀吉に呼ばれ、一時休戦。といつても俺のところにはもう敵は来ないみてえだし別に支障はない。

「で、どうした」

「Bクラス代表、根本のことじやが……」

どうやら秀吉のはなしだとBクラス代表の根本 恭一は、性格の悪さに評判があるらしい。

勝つためならどんな卑怯な手も使うそだ。

「雄二が心配だ。戻つてみるか」

教室に雄二一人を残すのは危険かもしれない。まあ、あいつのことだしたいしたことはないだろうけど用心にこしたことはないだろ？俺たちは急いで教室へと向かった。

「なんだよこれ」

「ひどい……」

「やられたのう」

教室に戻った俺たちを待っていたのは、無残なちやぶ台と、ボロボロになつた筆記用具だった。雄一が留守にしている間にこんなことを……なんてやつだ根本。

「ところで雄一はどうして留守にしていたのじゃ？」

「向こうから協定の申し出があつてな。調印に行つていた

「協定？」

「ああ。今日の四時までに決着がつかない場合は明日へ持ち越し。その間の戦争に関する行為は一切禁止するつて内容だ」

そんな俺たちの得しかないような協定をなぜ？しかもいつもやつて簡単に点数の回復をさせないようにすることは明日に持ち越すつてことだ。そうすれば俺たちのほうが有利になる。ところが本のやつなにか作戦が……？

「うわっ、健吾。見てこれ

明久が俺のカバンを指差す。

「！？」

そこにはボロボロになつた俺の筆記用具。

そしてボロボロのカバン。その代わり程度に置かれたランドセル。

野郎……。

「……いや修復不可能だな」

雄一もそれを眺めながら言つ。

えつ、修復不可能？そ、それって

「やばい」

「へ？」

俺のつぶやきに明久が反応する。

「どうしたの健吾。他のものは無事なのに」

「ああ。他の中のものはな。問題はそれじゃねえよ」

「？」

そう。問題はなにが残ったかではなく、なにが壊されたか、だ。
やばい。むしろこれは大問題だ。

「け、健吾」

「あーあ。明日からお先真つ暗じやねえか。根本の野郎。絶対に一

叩き潰す。

俺の平穏を壊した代償。きつちつと払つてもうりひばい。

根本くん。

俺とカバンと壊された日常（後書き）

今、ハロウィンにむけて短編を制作中です。

でもそのためにはAクラス戦を終わらせるなくしては

あともうすぐだ！頑張れ俺！！

姫路と根本と奪われた手紙（前書き）

唐笠さん、感想ありがとうございます

それでは、いきまーす

姫路と根本と奪われた手紙

教室の片付けには思つた以上に時間がかかった。被害を受けたのは、主に俺と姫路。まあ主戦力だからな。俺たちは。それでも、俺のカバンを使えなくなるくらいまでボロボロにするのはひどいと思うぞ。これじゃあ治せねえじゃねえか！ 姫路にはシャーペン折るくらいしかしてなかつたくせに。なんだ！ 嫉妬か！？ とまあ俺たちが片付けていた間に、四時になり、俺たちの戦いは明日に持ち越された。

・・・・・はずだつた。

なにやらおかしな行動をしているCクラスに条約交渉を行つたことで事態は一変する。

Cクラスの代表が根本の野郎と手を組んでいたのは誤算だつた。あつという間に協定は破綻。戦争は続行。どうにか一日を切り抜けはしたが、その代償は大きいものに思える。

「静かにしなさい！ 豚ども！」

まあ、今その分の作戦を実行しているわけだが。

秀吉が姉を真似てCクラスを挑発し、Fクラスに意識をそらす。つてか、秀吉の姉さんはこんなに怖いもんなのか？

このような雄二の機転で戦死者こそ少なくて済んだが、一つ、気になることがある。

それは姫路だ。

一夜明けた今日、なんだか様子がおかしい。疲れているというよりは戦いに身が入っていない。なにか他のことに意識がいつているように見える。

「戦死者は補習ー！」

また一人、補習室送りにする。『いつも根本の手駒。そんなやつらに容赦もなにもない。

「ん？」

「どうしたの健吾

ふと見たことのあるシリエットが目のはしに映る。姫路だ。なにか根本と話している。

手には一枚の封筒。・・・・・あれは！

「あれ・・・・・」

明久も気づいたようだ。あれは姫路が明久を誘った焼肉のチケット。昨日教室を荒らしたときに盗んだんだろう。まさかあいつ、これが目的で・・・・・！

「おい、明久。行くぞ！」

姫路がどうにかできる状況じゃない。俺と明久ならついでに根本を一

「待つて！」

明久が小声で俺を止める。

「どうしたんだよ

「僕たちは今出でいけない。出て行っちゃいけないよ

「なんでだよ」

「姫路さんを傷つけることになる

「は？」

明久が嘘をついているようには見えない。

もしかしたらあのチケットは姫路の大切なもので明久以外には知られたくないのかもしない。

そんなものを盗み、根本はそれをネタに脅してゐるわけだ。つくづく神経が腐つてゐるな。

「わかつたよ

「健吾」

「多分今同じ」と考えてんだろ？ なら行こうぜ

「うん。でも待つて」

明久がゆっくり、遠くから姫路を呼ぶ。いかにも姫路がいたのだけを気づいて声をかけた風だ。

「吉井くん！？」

「姫路さん、朝から体調よくなさそうだし、僕と健吾に任せて休んでて」

「でも」

「いいから。俺の学力はお前並だぞ。なめんな

「は、はい」

姫路がかけていく。根本は逃げたようだ。

根本。俺の動きも止めなかつたこと、後悔させてやる。今の俺は、機嫌が悪いからな。

根本は絶対に俺たちが

「「ぶつ壊す」」

「で、なんだ？ 一人して。脱走ならチヨキでしばぐや」

開口一番、おつかない」とを言われる。俺たちが話しているのは我らが代表の雄二だ。

別に脱走目的ではない。

「姫路さんに戦争に参加させないで欲しい」

「はあ？」

意味がわからないのも無理はない。姫路が戦争に参加しないこと自体、負けにいくようなものだからな。

雄二は最初、冗談でも聞いているような顔をしていたが、真剣な俺たちを見て、すぐに真面目になる。こういう察しのいいところはこいつの長所だな。

「別にいいが 。その代わり姫路の仕事をお前らでやれ」

「失敗したら ？」

「言わなくちゃわからねえか？」

雄二が威圧感たっぷりで俺たちを見る。それくらい、失敗は許されないのでだろう。

「根本に攻撃を仕掛ける。できるな？」

「任せろ！－！」

意気揚々と教室を出る。もしこれで俺たちが負けたら姫路は自分を責めるに違いない。そんな後味の悪いこと、させつかよ！

「本当にいいんですね？」

「はい。健吾には兄としての威厳を見せなきゃいけないですから」

「俺の理由は言わないでおきたいです」

ただの殺意だし。

「いいでしょ。許可します」

「試験召喚」

俺と明久の召喚獣が現れる。これはケンカではなくれつきとした作戦だ。

「よし、いくぞ明久！」「急成長」

俺の掛け声で召喚獣がでかくなる。これが俺の腕輪の能力。自分の召喚獣を成長させて戦う。一回で消費点数は二百点。まあその分効果は長いし、本物の小学生サイズまでにはなるからかなりでかい。でもなんで小学生サイズなんだろうか。

「か、可愛いいい」

教師が俺の召喚獣を見る。「こいつは俺がこの前職員室に連れていかれた時、人一倍俺に興味を持っていたやつだ。これならどうにか気を引ける。

「おらあああああ

すぐ近くでドスンと音がなる。明久の召喚獣が壁を壊す音だ。しかし教師はそんなものには気づかない。というか俺の召喚獣しか見てない。なんか身の危険が・・・

「ドスン！ ドスン！」

明久の召喚獣が壁を壊すたび、明久の拳からは血が流れる。

「ドスツ、ドスツー

明久の額に冷や汗が滲み、足元もフラフラとし始めた。

「一旦戻るぞ」

「なんだ？ 逃げるのか」

雄一からの合図が聞こえる。しかし明久は徐々に力が弱くなつていく。

「おい、明久？」

「…」

返事がない。恐らく全てがギリギリの状態なんだろう。

「ガスツー

「くつ？」

俺の拳を壁に叩きつける。もちろん召喚獣は使えないから素手で。でもおかげで明久も正氣にもどつたようだ。

「健… 健吾？」

「いいから、召喚獣を動かせ。俺の力がじゃあ対して力になれないからな」

壁に当たった俺の拳から出た血が、下のほうに流れていく。

「わかった。うおいやああああ

「バコン！」

大きな音とともに壁が崩れ去る。根元はそんな俺たちを見て、目を丸くしていた。

「おっす、性格の悪い外道野郎」

「それではとりあえず」

「「くたばれ！ 根本 恭一いい！」」

「…………たくつ、遅えんだよ。バカ一人」

…………うして俺たちの対Bクラスの戦争は、Fクラスの勝利として終わった。

姫路と根本と奪われた手紙（後書き）

こやせや、やつと終わったよ根本編。

今今までには△クラス編に行きたいんだけどなあ。

いけるかなあ

俺といふて本への復讐（前書き）

—おじいちゃん

てなわけで早速始まりです

俺と客と根本への復讐

根本を倒した俺たちは、交渉の為Bクラスに残っていた。

「俺からの条件は今からAクラスに言つて試験召喚戦争の準備はできていくと宣言して」。あくまでも宣言だけだぞ。宣戦布告はするな」

「それだけか？」

根本は雄二がもつと要求するもんだと思つていたんだりつ。おずおずと聞いていた。

たくつ、つこわつままでの態度は一体なんだつたんだよ。

「俺からはな

雄二が明久を見る。

「僕からの条件。それはこれを着てもらうことだ！」

明久がどこからか女子の制服を取り出す。別に女装させなくとも制服は手に入るんじゃないかな？

「あとは俺だな。つてもなあ、特にはなあ

「え？ なんで？ だいぶ恨んでると思つてたけど」

「ああ。だけさつき思いつきリストレスは発散したしな

そもそも女装するつてだけで充分な罰ゲームになつてるし。俺のイララをぶつけるとなると、こいつをボコボコになくなげやいけない。それはそれで問題だう。

「じゃあ壊されたものさ？ 弁償とか」

「…………」「.

明久の言葉で気がつく。確かにボ「ボ」はだめだが……。あるじやねえか。てつとり早い復讐が。

「やうだつたなあ。どりすつかなあ

「べ、弁償はするー！」

根本が叫ぶ。なんだよ、学園長にでも言ひつけたか？

「弁償なんてなあ、もう遅いんだよ。いや、お前が今更なにをしようとひでもう遅い。だから…………」「.

根本のアホ野郎に視線を向ける。

「お前の女装姿[与]真集でも作りせてもらひおいつかな

「は？」

「ちゅうどこい。お前がくれたこのカバン。返すよ。女装[与]真だけじゃつまらねえだろ」「

根本が無言で首を降っている。やうにやばほひつぱうやつてランドセルなんか手に入れたんだろう。

「そ、それだけは勘弁してくれー！」

「いいのかあ？ 断わって。全ての条件をえ飲めば、教室は取り替えないのに」「

「これは雄一の策略だ。田指すはAクラス。他の組は手駒くらーにし

か思つてないらしい。

「まかせろ！ 僕たちが絶対にやるせる！」

「おう、強制だ！」

他の奴らが声をあげる。Bクラスのやつらはこいやつばかりだなあ。
代表は修復不可なくひびきで腐つてゐるけど。

「じゃあ、よろしく」

雄一について教室から出て行く。

「あれ、見ないのか？」

「誰が見るか、んな気持ち悪いもん」「

俺たちの声がピッタリ重なる。そんなもの見たらい夢に出るつつの。

「その代わり、優秀なカメラマンを置いていくからな

「……不本意」

ムツツリー二が不機嫌そうにカメラマンを持つてゐる。こんな姿始めて見たかもしれない。いつもなら撮る気満々なのに。

「んじや、よろしくな」

「ムツツリー二も頼んだぞ」

「可愛くしてあげてね」

「それは無理。土台が腐つてゐるから」

去り際、そんな声が聞こえた気がした。根本、本当に人望はあつたのかなあ……。

交渉後、教室に戻る。そして扉を開ける。

「遅かつたじゃない健吾。お密さんがー」

ースパンツー

勢いよく扉を閉める。今見たことは忘れよう。うふ、そうしよう。

「け、健吾。今教室にものすごいにかつこいい人が……」「なに言つてるんだ明久。そんなやつFクラスにいるもんか。あっ、俺先に帰るな」

そう言つて本氣で走る。

「待て、カバンはどうした」

雄二に捕まえられた。

「い、いや。ボロボロだつたし」

「じゃあ教科書は」

「明日でいいかなと」

「お前、なんか怪しいな。明久、せつせつ扉を開ける」

「うん」

「あつ、ちよつ！」

明久が軽快に扉を開ける。ま、まずは顔を隠して……それ
で……

「健吾おー」

なんだかでかいのが飛び掛かってくる。雄一につかまれているから、逃げようにも逃げられない。

「健吾…………？ 知り合いの人？」

明久の苦笑いが妙に悲しい。

「違う。変質者じゃないか？」

「健吾！ 兄になんてことを言つのです！」

「いらぬ」とを言つなあああああ……

「えっ、お兄さんなの？」

「ま、まあな。つて」と迎えがきたから帰るな！ みんなまた明日…！ 行くよ爽兄。」

カバンを持つて急いで立ち去る。これ以上爽兄がここにいたら色々と危うい。急いで連れて帰らなくては。

「け、健吾。ちょっと待つて下さい！ 僕はこのクラスの方々にお話が…」

「それは今度な。今は忙しいんだよ」

急いで爽兄を引っ張つていく。

「おい健吾。別に今は暇だから平氣だぞ」

雄一が笑みを浮かべながら俺を見る。「の野郎、おもしろそうとか考えてるな。

「では、そうしましょ。僕は神田 爽吾と申します。健吾の兄です」

「吉井 明久です」

「坂本 雄一です」

「……土屋 康太」

「木下 秀吉じゃ。これでも男じゃぞ」

「姫路 瑞希です」

「島田 美波です」

いつのまにか教室にいた爽兄の挨拶に合わせて、他の奴らも挨拶をする。

にしても姫路たちはすげえな。俺から見ても爽兄はかっこいい。爽兄と話す時の女子たちは目をみんなハートにするのに。もしかしてこの二人……。

男じゃなくて女が好きとか?

「美波ちゃん、なんだか変な勘違いをされている気がします」

「偶然ね。ウチもよ」

なにか姫路たちが小声で言っていた。

「健吾、健吾のお兄さんうちの制服着てるよね? ここの学生だつたの?」

「いえ、違います。転校してきたんです」

やつぱりか。

「ここの時期に転校ですか?」

「どうしてじや？」

「健吾が心配だつたからです」

「心配？」

「健吾はこんな外見ですから、いじめられないか心配で……。なのに一人暮らしなんて……」

ん？」この流れつてもしかして悪いの俺になつてる？

「で、発信機が壊れたので約束通り転校してきたわけです」

「「「発信機！？」」「」」

びしげにひづく、すぐペラペラ話すんだろうか。

「はい。カバンに筆箱に……健吾の持ち物全てにつけてあります」

笑顔で言う爽兄を見てみんなの視線は俺に向けられる。

「い、言つとくけど、俺は嫌だつたんだからな。ただそれが外れたことが分かれば爽兄が転校していくつて言うから……」

それだけは嫌だつたのに根本の野郎！！

「てことは三年生ですか？ もしかしてAクラス？」

明久がそんなことを言つ。まあ兄つて言われてあんな顔してりやあそもそも思えるけど。

「いえ、一年Fクラス。」「」

「「「ええええええ！」」「」」

それが爽兄の実力です。

「えつ、双子とか？」

「いえ、一歳上ですよ」

「じゃあわざと？」

「いえ、実際三年生にはいるはずでした」

「ならなんで？」

「転校前の学校からもう一度一年生にと、連絡がきたらしくて」

そう、爽兄は頭が悪い。もしかしたら明久も勝てるんじゃないかな？

「と、いうことですので、これからよろしくお願ひします。どうぞ爽吾とお呼びください」

こうして力にならないやつが一人増えた。といつかこれで平氣なのかな？対Aクラス。

俺とい客へ原本への復書（後書き）

ノロノロじてこぬつむにもつずハロウインも終わってしまつ……。

Aクラス編急いで終わらせよつてことで更新です

一日に何個も更新したいけどできない

ああ、自分の容量の悪さが限めしい

人物紹介2 & バカテスト2（前書き）

新キャラの紹介です

人物紹介2 & バカテスト2

神田 爽吾（18）

健吾の兄。めちゃくちゃ美形。のくせにめちゃくちゃバカ。

健吾が大好きないわゆるブラコン

召喚獣は武器を持つていらない丸腰状態
腕輪の能力は一生でないんじやないですかねww

得意な教科 音楽
苦手な教科 数学

「バカテスト」

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

「光は波であつて（ ）である」

姫路 瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント

「よくできました」

榎田 爽吾の答え
「真秘的」

教師のコメント

「非常に素直でいいと思いますが、
「真秘的」ではなく「神秘的」です」

吉井 明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

「先生もRPGは好きです」

坂本 雄一

「いけ！」

土屋 康太の答え

「必殺奥義！」

榎田 健吾の答え

「サンダートルネードオオオ！！！」

教師のコメント

「しかし攻撃は外れた」

坂本・土屋・榎田のコメント

「ちくしょおおお…！」

教師のコメント

「テストで遊ばないでください」

～テスト返却後の感想～

瑞樹「みなさん、ゲームにはまっているんですか？」

明久「うん。ちょっとRPGにね」

雄二「明久に借りたんだが、俺たちがはまっちゃってな」

康太「……おかげで寝不足」

爽吾「そう言えば健吾もやってましたね」

健吾「おもしろいよ。今度やってみる」

爽吾「いえ、昨日少し借りたので平氣です」

健吾「えつ……？」

爽吾「安心してください。ちゃんとセーブもしましたよ」

健吾「えつ……。ち、ちょっと先に帰る」

爽吾「なんですかね？ あんなに焦って」

明久「そういうえばあのゲーム。セーブできる場所が一つだよね」

雄二・康太「健吾……」

人物紹介2 & バカテスト2（後書き）

今見直すと、健吾も爽吾もややこしいですね。

気づくのが遅かったorz

バカと俺たちと下剋上！？

とうとうAクラスとの戦いがやつてきた。

代表戦で多く勝ったほうが勝ちという簡単なルールだ。まあこれら俺たちにも多少有利な点はある。

それにしても、あの霧島 翔子と雄一が幼馴染とはな。それに驚いたが、その後のクラスの奴らのほうが驚いた。まさか容赦なく雄一を殺しにかかるとは。本当に怖いクラスだ。

「健吾。なにをぼつとしているんですか？」

「えっ！？ いやなんでも」

「ほり、秀吉くんですよ」

第一回は木下姉VS秀吉。成績に差はあっても、双子だからこそ知っている弱点があるはずだ。それを使えば……。

「つて、あれ？」

表示された点数？ を見る。

「生命活動 木下 優子 WIN

木下 秀吉 DEAD」

「秀吉いいいい

健闘する姿も見られないまま、秀吉は星になっていた。

「代わりに出る方は

「僕が出ます」

「爽兄！？」

隣で爽兄が手をあげていた。

「僕らのクラスの勝利のためです。戦いましょう」

爽兄が戦わないことが俺たちの勝利につながるんだけど……。つてそんなこと思つてる場合じゃない。早く止めないと……

「爽兄！　いいから！　頼むからでないで！」

「健吾、平氣です。僕だつて勉強してきたんです」

「じゃあ、召喚してみてよ。雄一たちに決めてもらおう」
「望むところです。試験召喚」サモン

幾何学模様が表示され、出てきたのは——

「数学　　榎田　爽吾　　11点」

「一桁取れたんですね」

丸腰の爽兄の召喚獣と、自身満々の爽兄。そして想像を絶する点数
だった。

「どうしよう。僕の方が高いよこれ」

「点数悪すぎると、武器すら持てないんだな」

「すまん……」

謝ることしかできない。

「どうですか」

「すみません。ここは爽吾さんより健吾に出でもひつたほうが……

・・・

「そうですか」

爽兄は分かりやすくへこんでいる。

「というわけで俺がいきます」

一步前へ出る。いくら俺も点数が高いことはいえ、相手はAクラス。気を引き締めないとな。

「か、かわ・・・・」

「？」

「なんでもないわ。始めましょ。試験召喚サモシ」

「試験召喚」

お互の召喚獣が出てくる。といひでせりあいにいつはなんて言ったんだ？かわ・・・・皮？

〔数学 木下 優子 362点〕

〔神田 健吾 400点〕

爽兄が来て回復ができなかつたから、こんなもんかな。

「なかなかね。あなた、本当にFクラス？」

「まあな」

「まあいいわ。こちから行くわよー。」

木下姉の攻撃が俺の召喚獣に当たる。それを避けたあと、不意打ちで一発食らわせる。

「まだまだ！ これに勝てば…………。弟がもう一人…………。」

なんだか木下姉のつぶやつた言葉に寒気を覚える。弟がもう一人つて…………なに？ 僕、負けたらなにされるの！？

「まだ死ぬ訳にはいかねえええ！！！」

快心の一撃を召喚獣に食らわせる。大幅に点数を削ったあとでラストの一撃。

「木下 優子 0点」

まあ、こんなもんだろ。それにしても木下姉は妙に俺をなごりおしそうに見ていた気がしたが…………氣のせいということにしておけ。

俺の勝利で、Fクラスは勝ち星をあげたものの、次の明久により、同点となる。あんな瞬殺、描写するまでもない。

次はムツツリー二の番、これは当然勝ち。同じように保健が得意な奴が敵だったのにはひやひやしたが、まさか腕輪を使うとは。そして今は姫路のわけだが…………。

「いきます。サモン試験召喚」

何故か爽兄が出ている。というのも、始まる前、姫路が突然倒れ、急遽爽兄が出ることになった。相手は学年次席の久保 利光。当然、爽兄に勝てる要素はない。

「なにか科目の指定はありますか？」

「そりですね。僕は向こうの方に合わせます。歳上です」

久保は恐らしく負ける気はない。俺もそりだと思つ。

「では、家庭科にしましょう。得意科目ですし
「は？」

俺の口からは間抜けな声が出てしまう。今爽兄なんて言つた？ 家庭科が得意科目？

「そ、爽兄…………？」

俺が言うと爽兄はまかせろ！といった感じの笑みを向ける。

「そ、爽兄！ 今すぐ科目を――」

「「試験召喚」」

二人が同時に召喚する。もうダメだ。爽兄は自分が思つていてるよりも遙かに家庭科は苦手なんだから。

「家庭科 久保 利光 250点

あれ？久保も意外と点が低い。久保、焦つてるな。家庭科は苦手なのか。

榎田 爽吾 30点】

爽兄もほうが遙かに下だけど。あつ、久保驚いてる。あいつもあんな顔するんだな。

「あ、ちょ、健吾？ 爽吾さんは家庭科得意なんじゃ……」

「自称だよ。本当はめちやくめちやだめ」

「腕前は？」

「姫路くらい」

「「「それは……」「」「」「」

みんながうつむいていた。島田は姫路の看病でいないし。今この場にいるやつらは同じ苦しみをしるやつらだ。

「で、でも、点はいいんだね」

「まあ、家庭科は好きらしいからな。裁縫ならできる」

「なるほど、実技（料理）以外は問題ないわけだ」

雄一の察しが良くて助かる。とか話している間に爽兄は負けて帰ってきた。瞬殺か。

「すいません」

「気にしないでください。俺が勝てばいいんすから」

「本当に勝てるの？」

「おう！」

雄一のこの言葉は、強がりではないようだ。さて、次は霧島と雄一の一騎打ち。頼んだぞ雄一！ ！

小学生レベルの問題。こんなのは霧島にとって簡単なこと。でも一問、あの問題をえ出れば逆転はできる。

「坂本くんには悪い」としました。私が倒れたりしなければ……

「……」

「気づくと姫路が立っていた。気づいたら具合は良くなつたらしい。

「平氣だよ姫路さん。あの問題をえでれば」

「そりですよね。坂本くん、がんばつてください」

どんどんと問題が表示されていく。霧島はその問題を顔色も変えず
に平然と解いていく。これでは満点をとつてしまふかも知れない。

「あつ！」

「どうした？」

明久の視線の先をその場にいた全員が確認する。そこには大きなモニターに

【（ ）年 大化の改心】

「「あたあああああ！」」

「やりました！ やりましたよ美波ちゃん」

「やつたわね。瑞樹」

「これで・・・」

「――「Fクラスの勝利！」！」

全員が歓喜でわいた。と思っていたら一人だけそうなつていなかつがいた。

「どうしたの爽兄」

爽兄は難しい顔をしままモニターを見ている。

「はたして本当に勝つことはできるのでしょうか？」

「大化の改心の問題はでたし、いけるとと思つよ」

「いえ。確かにそうです。そこで霧島さんは点を落とすかもしだま

せん」

「うん」

「でも、坂本くんは満点を取れるのでしょうか」

「え ?」

「雄一が満点を取れない? これは小学校の問題。取れないわけが . . . 。

「明久、お前何問解けた」

「うーん。12問くらいかな」

「島田は?」

「15問ね」

「姫路は?」

「90問は解けました」

「ムツヅリー二は?」

「. 30問程度」

さつと血の気が引く。爽兄が何問解けたかなんて大体予想はつく。俺たちは重要な勘違いをしていたのかもしない。いくら神童と言われていたつて、それは昔の話。たしかに今満点が取れるとは考えにくい。

「やめつ。 結果発表です」

モニターに全員の視線があつまる。

「Aクラス 霧島 翔子 97点」

VS

「Fクラス 坂本 雄一 53点」

みんなの机がみかん箱になつた。

バカと俺たちと下剋上！？（後書き）

どうにかAクラス戦終わつたあああ！

途中から焦りからか無理やりになつてしまい謝ります。

すいません

でも次はちゃんとしますよ！

ちなみに次あたりでこの章もおわり新章に

突入です！

バカなクラスの後日談（前書き）

今回は少々短いです。

バカなクラスの後日談

「さて。明久。こいつはどう処分する
「そうだね。ここは」
「「潰れろおおおーー！」」

雄一は強いがいくつも机を落とせばくたばるはずだ。

「なんだよあの点数！ 自信ありげだったじゃねえか！
「それに関しては言い訳もできない」
「期待させといで！ ここのバカ雄一！」

机を持ち上げ雄一に目標を定める。

「 . . . 雄一」

放り投げようと力をこめた腕をすぐ下ろす。霧島に当たつたら大惨事だ。

「約束。命令を一つ聞いて
「なんだよ
「わたしと付き合つて
「お前、まだ諦めてなかつたのか

一瞬わけがわからなくなる。これは告白つてやつか？ 霧島が雄一を
？ 幼なじみでそんなのどこのラブコメだよー

「わたしはずっと雄一のことが好き」
「はあ」

なんだ？ ここの小つ恥ずかしい展開は？ というか、なんでみんなあんな平然としてられるんだよ！

「霧島さん、積極的ね」

「見習いたいです」

女子なんか、尊敬の眼差しで見てるし。明久たちは普通に見てるし。ああ、なんだ？ 僕がおかしいのか？

「諦める」

「嫌だ。早速明日デートに行く」

「デ、デートって……。もうだめだ。この空氣耐えきれん。

「かか帰らせていただきます

「健吾どうしたの！？ 顔真っ赤」

「きき気にすんな。じゃあな」

「すいません。健吾が恋愛的な空氣が苦手なの忘れてました。僕も失礼します」

急いで外へ飛び出す。ああ、恥ずかしい。告白なんて人の目の前でするなよ。

あのクラスでこれからもやつてくんだよな。女子少ないから問題ないと思うけど。

なんか不安になってきた。

バカなクラスの後日談（後書き）

次回からは新章突入！

. . . . の予定です

バカテスト3（前書き）

バカテストはじまりはじまりー

バカテスト3

学園祭で出し物を決めるアンケートに答えたさい

「あなたが一番欲しいものはなんですか？」

姫路 瑞希の答え

「みんなとの思い出」

教師のコメント

「みんなとの思い出になるような出し物
もいいかもしませんね」

神田 爽吾の答え

「クラスのみなさんと打ち解ける場」

教師のコメント

「途中からの転校でみんなより年上ですから、そういう時間も必要ですね」

吉井 明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

「INの解答に君の生命の危機を感じられます」

榎田 健吾の答え

「背が伸びる薬」

教師のコメント

「この解答からあなたの悲しみが伝わってきました」

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「この文化祭でみんなと仲良くなれるといいですね、爽吾さん」

瑞希「そうですね」

爽吾「はい。ありがとうございます」

健吾「・・・・・」

明久「健吾、なに泣いてるの？」

健吾「お前には分からねえよバカ」

バカテスト3（後書き）

次回から新章突入です

バカと春と文化祭（前書き）

文化祭編突入です！

それでははじまりです

バカと春と文化祭

まだ暖かな春の陽気。それもそのはず、今はまだ一学期。試験の喚戦争を終えた俺たちは、少しの平穏な日々を送っていた。が、今はまったく平穏とは言えない。

「で、クラスの出し物なにするんだ？」

黒板の前に立つて、クラスのやつらを見る。うん、ろくないくんが出なさそうだ。

「 [写真館]

「コスプレ喫茶！」

「姫路さん喫茶！」

「いや、こには健ちゃん喫茶だろ」

「待て！ 秀吉喫茶も捨てがたい」

早速収集がつかなくなっている。お前らに期待はしてなかつたけどな。

俺たちは今、来る文化祭の話し合いの最中だ。一学期に文化祭といつのばじうにも府に落ちん。どうせだったら夏休み明けとかにしてくれよな。

「明久、書けてるか？」

明久が書記なんものができるかなんて期待すらしていないが、いちおう確認で黒板を見る。

「コスプレ[写真]喫茶（秀吉・姫路さん・健吾）」

「こやいや…… まとめるべきだらう……」

「ほえ？」

確かに明久の頭で全員の意見がまとまるなんて思つていなかつた。だが、普通意見をまとめるとか？ ていつかコスプレ写真喫茶つてどんなのだよ！

「明久の頭が追いつかない！ 一人ずつ意見を言つてくれ」
「健七」「しゃう」「こう」…… レ喫茶！

わざとよつもひどくなつたな。

「明久、今のは書かなくていいぞ」

「えつ、そうなの？」

「そもそも日本語にもなつてないだろ……」

黒板をまた見る。

「健吾「コスプレコレクション喫茶」

・・・・・ 気がついたら俺限定になつていた。

「静かにしらつて！ おい！」

騒ぎは收まらない。「のままじゃ俺はコスプレ写真が流出するという一大事になつてしまつ。くそつ、奥の手だ！」

「うへ。僕の話し聞いてよお。ひくつ。うええ」

あえて見えるように教卓の横で座り込む。ちなみに涙は田薬だ。秘技！ 瞬間田薬さし！

「『めんね健吾。静かにするから。ね?泣き止んで?』」

「ほんと?」

「本当よ。ね?」

島田の鋭い目がクラス中に向けられる。一瞬でクラスが静かになつた。

「あつ、いいこと考えましたよ」

「爽悟さん?」

「兄弟喫茶でいいじゃないですか。健吾もお役に立てますし」

爽兄のバカ!! なにを言つてくれちゃつてるんだーーって

「兄弟喫茶」

明久も書かんでいいーー!!

「それじゃあ多数決で決めるわよ。兄弟喫茶がいい人ーー」

クラスも連中は今回で一番の団結力を見せていた。

バカと春と文化祭（後書き）

いろんな都合上により文化祭が早い設定です。
といふかすでに原作無視状態ww

兄と弟と役割分担（前書き）

では始まりでーす

兄と弟と役割分担

「あとは役割分担か。キッチンとホールでいいよな」

渋々、進行を進める。

「…………キッチンは俺にまかせろ」

「お前、料理できるのか？」

「紳士の嗜み」

何時の間にか目の前に立っていたムツツリー二が言う。紳士って……。お前、行動がすでに紳士じゃないんだけど。

「お料理でしたらわたしもお手伝いを——」

「「「いや、いい！」」」

姫路、なんてことを言い始めるんだ。俺たちは胃が特殊だから平気だが、凡人は食つたら即死だぞ。

「でも兄弟喫茶ですからわたしたちは……」

なんという凡ミス！ 兄弟、とついている時点で店員は男のみ。ぐああ、なぜ気づかなかつた。

「簡単なことです。お一人とも姉か妹になればいいのですよ

「「？」」

爽兄の言葉に一人は？マークを浮かべる。確かに兄弟に限らず姉妹にはできる。そうすれば被害者はいなくなるな。

「そ、それがいいよ姫路さん！　お姉さんとかいいかもね」「そ、ですか？　それじゃあ……」

姫路がその気になつてゐる。ナイスだ明久！

「ア、アキ！　ウチは…………？」
「美波もお姉さんかな？」
「そ、そう？　がんばりましょ、瑞希」「は、はい」「は、はい」

二人がやる気になつてゐる。心変わりが早いなあ。もしかしてどちらやりたかったんじゃないのか？

「明久、それだと妹もいないとおかしくないか？」
「平氣だよ。秀吉がいるじゃないか」「明久！？　それはおかしくないかのう！」
「ああ。平氣だな」「健吾まで！！」

秀吉なら妹に限らなくとも他也演じられるだろう。

「じゃあ、ホールは明久、姫路、島田、秀吉、爽兄、雄一あたりでいいよな」「えつ、健吾は？」
「俺はキッチンだよ」

面倒だし。

「そんな！　健吾はホールだよ！　ねつ、雄一」

「…………ん？ ああ。どうでもいいんじゃないか？」

明久の言葉で、ちやぶ台に突っ伏していた雄一が顔を起こす。あいつはこいつ行事に興味がないだろ？が、本当にやる気ないんだな。

「健吾、いいんですよ無理しなくて」

「爽兄…………」

爽兄だけが俺の気持ちをわかつてくれてている。さすが俺の兄ちゃん。

「健吾は僕以外の弟になるのが嫌なんですね」

前言撤回。なんかすつごい勘違いされてるし。

「明久、俺、やるよホール」

「本當？ ゆしつ、決定！」

きつと俺が折れないと更にややこしくなると思つ。まあ姫路たちに客が行って、俺は楽できるだろ。

「姫路、島田、俺、明久、雄一、爽兄、秀吉以外はキッチンその他を頼む」

「オッケー！ 我が弟よ！ ……」「

なんでこいちらはこんなにテンションが高いんだろ？

とりあえず姫路と島田が姉。明久と俺が弟。秀吉がいろいろ。爽兄と雄一が兄。

で決まつたが、雄一はちゃんとやつてくれんのかな？

ふと爆睡中のクラスメイトを見る。あいつがいるといないじゃあ、クラスの士氣も変わってくるからな。どうにか動かせられたら

兄と弟と役割分担（後書き）

テストが近づいたり、ネットがつながらなく
なつたりで「不幸だーーー！」って叫んでま
した

今はネット繋がりますが、

テストが近いー！

．．．．．はあ、ため息しか出ねえや

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905w/>

バカとテストとショタ少年！？

2011年11月26日21時51分発行